NAKED EYES NOBORU KURISAKI

PART 2 - 7

INTERVIEW·KOUICHIRO GOSHO PHOTOGRAPH:TOSCIO TOMITA

官能が誘い出したかのように、好き嫌いだけで生きている。

一九九七年還暦を迎えんとする彼に表参道近くでやっと面談する機会を得た。今やごくあたりまえに、どこの花屋の店先にも置かれているかすみ草。日本での飾花にあの可憐な白い花を定着させたのは、他ならぬこの男である。六〇年代後半「かすみ草のクリちゃん」と呼ばれ、多くの若者や文化人を感動させ尊敬と親愛を得ていたことを、誰からともなく聞かされていた。当時、彼の飾花が創り出す空間を味わいたいと、マイケル・ダグラス、ジャック・ニコルソンやヴァレンチノ、コッポラやミックジャガーまでもが彼のサロンである「西の木」を訪れてきたことは有名な話である。

その後七〇年代、国内外での個展は絶賛を博し、七五年英国エリザベス女王陛下主催晩餐会や舞踏会の飾花、あるいは八〇年代、辻村ジュサブロー舞台飾花、劇団四季やNHKでの舞台美術等々、花歴はとどまることなく積み上げられた。

その様に彩られた飾花パフォーマンスの一方で、彼は鼓を習い、茶道に傾き、本山と家元の街である京都へ毎月三〇年間欠かすことなく通い、今も生け花を教授している。

彼は炭坑の街、九州は福岡県飯塚市生まれで、一七歳の時家出同然で東京暮らしをしはじめた。

誰に花の道を教わった訳でもなく、どこの流派の門下生でもない。二〇歳の頃から我流で、心地よい空間を創るべく、花を生け、飾り、扱いはじめたのである。「生け方は十年毎に変わってるよ」と彼は言っていたが、どの花を見せられても一瞬時間を止められ、凝視させられ、縛られ、その空気に虜にされてしまう。通りすがることをさせない魔力を生み出す不思議な男に興奮気味に問いかけてみた。

■ 肩書を華道家とせず、なぜ花師というラベルにするのか。

ほんとは肩書なんていらないんだよ。僕は「くりさき　のぼる」なんだもん。望めるものなら「風流人」と呼ばれるようになりたい。しかし、大徳寺で説法を聞く度に、人間のギョッとするところが自分の内に見えてしまう。まだまだ生臭いから、憧れるけど風流にはなれないな。

「道」には「作法や生け方に普遍的なもの」があり、「家」には「大成している」の意がある訳で、恐れ多いよ。生け方は変わるし、仕事の意識でなく好きでたかが三〇年余やってるだけだから…。

むしろ何が好きか解るように…ひとまず…花師。

■ なのにあなたは、家元の多い排他的な京都へ行くの。家元を目論んでるのか、それとも家元制度への挑戦では。

無粋だね。日本人が忘れてるものが、まだ京都にはある。京都は美意識が高いし、勉強になる。いい舞台ですよ。ただそれだけですよ。

好きで教室を開いているだけだからピラミッドもない。

だから組織の為に嫌なこともする必要がない。…挑戦なんてとんでもない。僕は何百年もやってる訳じゃないんだから。唯々、粋に、好きに、人が集まるから。

■ 「花が好きなら、それでいい。」とのことだが何を教えるのか。習う者の心構えは。

花を生けるとは自分の空気を創り出すこと。花は空気そのものです。時代背景が変わる様に花の生け方も変われば良い。だから決まった型を教えたことは一度もない。自由自在に空気空間に合わせて変化してゆくのが「私の生きた花」である。「こうした方が綺麗だよ。ここに似合うよ。時にはこの方が生きますよ。」つまり「花の心」「花鳥風月」「花点前」についてアドバイスや講話はするけどね。

床の間、畳のある家には、それに似合う生け花があり、ない場所では、またそれに似合う生け花があるが如し。花はそのものが生きものだから、同じ花でも一輪ずつ表情が違うし性格が違うことを心しておかないと。

日本の昔からある花は僕が見ると恥ずかしそうに傾いちゃうし、いとしい。外国から最近入ってきた花は、グッと見ると向こうから笑ってくる。媚びてるし挑発してくる。まるで人様と同じだね。

■ 自由に好き嫌いの感情だけで生きて、悔いることはないのか。

反省すれど後悔はしない。ドンドン進んで行かないと。怒りも悲しみも沢山あるよ。

でも、悲しいかな、いいことはどんどん増えていって覚えているが悪いことは忘れてしまう。

花も自分も生きているんだから、いい空気とコンタクトし、そして次の空気を創ることだよ。自分の皮膚感覚、動物的感性を信じてごらん。屈折して持ち越さず何でもシンプルにね。これが私の尺度なんだ。

■ 若いこれからの創造者へメッセージを。

やんちゃで、我が儘になること。それが出来ないと創れない。モノを創るということは我が儘の表現以外の何ものでもない。

彼の作品描写を字句にするのは難解である。彼は「花は鏡である」と言う。具象、印象、論評を諦めこう述べておく。屈折率を充分に心得た者が、そのハーモニーをシンプルに指揮する術を弄しているのであろうか。

ひとときの時空を共にしたが、いとも簡単に心の扉を開かれてしまった。抵抗しようと試みて視線をを外したが、目線は作品写真集の作品（「花たち」「飾花」「酔花」文化出版局発行）に奪われ、目眩く衣を剥ぎ取られた。心に残る感覚は「ぬくもり」という安堵だけであった。

（敬称略）文・五所光一郎
写真・富田透士夫

栗崎　昇

花師　NOBORU KURISAKI　flower artist